

日本語東京方言におけるモーラ・音節・フット

Morae, Syllables and Feet in Tokyo Japanese Phonology

藤川 直也

FUJIKAWA Naoya

要旨

拙稿における第一の目的は、1980年代以降理論的整備をみた韻律階層理論において想定される韻律階層のうち、下位の韻律単位であるモーラ・音節・フットに特に着目し、それぞれの韻律単位が日本語東京方言においてどのような役割を担っているかを明らかにすることにある。またそれと同時に、拙稿は日本語東京方言において実際に観察される種々の音韻的事実、及び韻律階層理論における Strict Layer Hypothesis (SLH)等を参照しつつ、それぞれの韻律単位はそもそも日本語東京方言において存在を積極的に肯定すべきであるのかについて、先行研究への批判を交えながら検証を行う。

構成

1. 韻律単位のユニバーサリティと韻律階層
 - 1.1. 韻律階層
 - 1.2. 音韻階層特徴：普遍的な特徴と偶発的な特徴
2. 日本語におけるモーラと音節
3. モーラと音節の関係：先行研究から
4. モーラと関連する現象1：複合語省略
 - 4.1. カタカナ語における省略形態（2モーラ+2モーラ）
 - 4.2. 省略形態のバリエーション：「2モーラ+2モーラ」以外の場合
 - 4.3. 複合語省略とフット
 - 4.4. 外国語における略語形成：ドイツ語の場合
5. モーラと関連する現象2：言い間違いと吃音
6. モーラと関連する現象3：音節区分けと音調
 - 6.1. モーラと形態変化現象
 - 6.2. 音節区分けとアクセント
7. 日本語における音節の役割

8. 音節と関連する現象 1：句頭の LH 音調
 - 8.1. 音節と音韻現象
 - 8.2. 単語アクセントとモーラ・音節
 - 8.3. 短音節で始まる単語 vs.長音節で始まる単語
 - 8.4. 拍内上昇と音節内上昇
9. 音節と関連する現象 2：下がり核位置の揺れ
 - 9.1. 日本語の単語アクセントは、モーラレベルで決定されているか
 - 9.2. 下がり核位置のずれと韻律規則
10. モーラの非等価性と音節・フット：音韻語は何から成るか
11. 日本語におけるフット
 - 11.1. 先行研究
 - 11.2. 女房言葉
 - 11.3. その他の音韻現象
 - 11.3.1. 愛称接尾辞
 - 11.3.2. 倒語とフット構造
 - 11.4. 1モーラ単語が許容されるかどうか
- 11.5. 第 10 節における問題の再考：独立拍と特殊拍の組み合わせが形成するもの

1. 韻律単位のユニバーサリティと韻律階層

1.1. 韻律階層

韻律音韻論における韻律階層とは、もともと生成音韻論の分野から発達してきた概念であり、主に欧米ないし欧米諸言語における研究は盛んであるものの、個々の韻律階層は日本語に対してどのように適用されうるか、と言う観点からの本格的な議論は、為されることが少なかったように思う。日本国外における日本語東京方言（以下、断りのない場合は、単に日本語と表記する）音韻論の本格的な研究としては、McCawley (1968) によるものがつとに有名であり、日本国内外問わず、同研究は現在でも最も重要な現代日本語音韻研究のひとつと見なされている。当然ながら、同研究は日本語韻律においてきわめて重要な役割を果たすと見られる音節とモーラにも言及しており、「日本語における最小の韻律単位は音節でありモーラではない」とする。

伝統的に、(主に印欧語族に属する欧米諸言語の) 韻律音韻論の主流において、音節は おおむねランゲージ・ユニバーサルであると見なされてきた。筆者にはその考えは、大概正しいものと思われ、現時点においては強く反対する立場は採らない。事実、英語やドイツ語など欧米諸言語をはじめ、中国語北京方言、朝鮮語ソウル方言など、洋の東西を問わず、音節の存在を認めてよい言語は少なくなかろう。

そして日本語についてであるが、拙稿の結論から言えば、日本語には音節が存在すると認めてよい十分な理由があると考え。拙稿は日本語における下位の韻律単位であるモーラ・音節・フットに着目し、それらの各々について確かに存在を認めてよいかどうかを検証する。無論、日本語や欧米諸言語にとどまらず、およそすべての言語に漏れなくこれらの音韻単位が存在するか、あるいはしなければならぬか、という問いについては、ここでは答えることができない。拙稿が着目するのは、あくまで日本語、およびその音韻に限定される。

とりわけ欧米における伝統的音韻研究は、言語にはおよそ広範に音節が存在することを前提としてきたが、その一方で音節と並ぶもうひとつの下位領域であるモーラ、及びそのユニバーサリティは、音節に比べれば、顧みられることが少なかった。例えば現代韻律音韻論における韻律階層理論の嚆矢と目される Nespor & Vogel (1986)は、同研究の想定する韻律階層において、階層の1つとして音節に言及してはいるものの、モーラに対しては階層としての言及は無い。仮に Nespor & Vogel (1986)の手になる韻律階層がモーラを含むならば、それは音節の下位に位置するはずである。

人間の音声言語一般におけるモーラの普遍度については、拙稿は深く立ち入らないが、少なくとも日本語について言えば、モーラを音節と同様に韻律単位ヒエラルキーの1段階に加えることは、十分可能であると考え。

1.2. 音韻階層特徴：普遍的な特徴と偶発的な特徴

韻律階層は一定の特徴をもってその領域を決定されるが、この特徴は発話の韻律実現において一般的・普遍的に出現する特徴、及び発話において起こる一部の形態現象の中で偶発的に出現する特徴とに大別される。例えば日本語の非頭高アクセント先頭において起こる LH 音調は、「非頭高アクセント」と言う前提が存在する限りは、おおよそ普遍的に発生

する韻律現象であり、前者の特徴に分類される。一方、後者の特徴に分類される例としては、例えば日本語の愛称接尾辞「-ちゃん」に先行する人名の省略形態がモーラ数（典型的には2モーラ）と一定の関連性を持っていること、等が挙げられよう。これは前者とは異なり、単語形態の範疇において偶発的に起こる現象である。例えば、愛称接尾辞「-ちゃん」に先行する人名の省略形態は、「人名」と言う条件を満たすすべての単語で普遍的に起こる訳ではない。省略形態が可能であるかどうかは、少なくともある程度、語彙的に決定されている。

拙稿は先行研究を参照しながら、日本語のモーラ・音節・フットにおいてそれらの領域を決定づける（とされる）いくつかの音韻特徴に言及するが、その中には単語や句レベルの韻律において一般的・普遍的に現れるものもあり、またある特定の場合においてのみ偶発的に現れるものもある。前者と後者の音韻特徴を比べた場合、前者の方が普遍性及び予測可能性において優れているのは明らかであり、ゆえに個々の韻律単位の領域を決定するための論拠としても優れている、と考えられる。そのため拙稿は、後者の音韻特徴を、韻律単位を決定する論拠としては、前者より積極的に評価する。これが拙稿における論考の前提となる。

2. 日本語におけるモーラと音節

モーラとは、拙稿において取り上げる「下位の音韻単位」のうち、その最小領域である。最も典型的には、日本語におけるモーラは大文字の仮名、長音記号、及び促音記号、これらの1つ分が表す単位であり、子音+短母音または短母音のみからなる。拗音（口蓋化母音）はモーラを形成しないが、長母音、及び音節末子音（鼻音と促音）は1モーラを形成する。ゆえに長音節及び鼻音・促音で終わる閉音節は2モーラである。モーラは日本語の発話における感覚的な等時単位でもあり、それ故に日本語は、類型上モーラリズム言語(mora-timed language)と呼ばれることもある(Trubetzkoy 1939)。この概念は音節を等時単位とする音節リズム言語(syllable-timed language)、および強勢音節の位置を等時単位とするストレスリズム言語(stress-timed language)に対立するものである。以下に伝統的な音韻研究における日本語の音節とそのモーラ構造について概述する。

(1) 1モーラ音節

- a. (C)V 鵜]、卵、尾]、蚊、戸、木]、目]、手]、詩、句]

b. CyV 茶、署]、社]

(2) 2 モーラ音節

a. (C)VN ホ]ン (本)、カ]ン (缶)、ピ]ン (瓶)、ヨ]ン (四)

b. CyVN シュ]ン (旬)、ジュ]ン (順)

c. (C)VH ト]ー (塔)、バ]ー、シ]イ (恣意)

d. CyVH チョ]ー (蝶)、キョ]ー (今日)、ショ]ー

(3) 3 モーラ以上の音節

a. (Cy)VHN チェ]ーン、ル]ーン (文字)、ロ]ーン、コ]ーン

b. (Cy)VNQ ロンドン]ツコ

c. (Cy)VHNQ ウィーン]ツコ

C 母音

Cy 拗音

V 母音

H 長母音

N 鼻音

Q 促音

] 単語の下がり核

3. モーラと音節の関係：先行研究から

洋の東西を問わず、多くの言語学者にとって、日本語韻律におけるモーラの卓立性及び重要性は十分に認めるところであり、筆者も現時点ではその考えに同意している。モーラに着目した日本語韻律論については、この数十年来、日本内外の研究者により、いくつかの特筆すべき研究がなされている。例えば Poser (1990) や Labrune (2012) は日本語のモーラ、音節、フットに関する詳細な研究を行い、そのうち Labrune (2012) は結論として、日本語の基本的な韻律単位は「音節でなくモーラとフットである」と述べる。たしかに音節を中心とした音韻分析においては、日本語における 1 モーラ、2 モーラ、ないしそれ以上のモーラ数を持つ音節は、モーラ数の違いに関係なくそれぞれ等価 (1 音節) と見なされなければならない訳であるが、しかしながら先行研究は日本語におけるこれらの「量的に異な

る」音節の有する性質は異なっている、とする。さらに先行研究は、韻律・音韻単位としてのモーラを考慮せずには説明の不可能な音韻現象が、日本語においては、実際に存在すると指摘する。(詳細は後述する。)

しかしながら先行研究は、音節とモーラについて、両者のうち片方を立てて片方を排除する、と言う風に、両者を相互排他的に捉える傾向にあるように見受けられる。筆者はそのような考えは採らず、日本語においてモーラと音節は存在し、しかも両者は相互に共存可能であると考え。たしかに先行研究が提唱するようなモーラに基づく音韻分析は、音節に基づく音韻分析と同様に、日本語音韻研究においてきわめて有用であると考えられるが、音節に基づく分析の有用性もまた、決して等閑視できるものではない。

日本語音韻研究においてモーラを等閑視し音節のみを偏重するのは、たしかに誤っているであろう。しかしながら反対にモーラを偏重し、むしろ音節の果たす役割は少ない、とする Labrune (2012)の説もまた、筆者には支持できない。この見方は日本語の音韻における種々の音韻的事実、及び日本語諸方言の地域的な多様性を十全に反映しておらず、また多分に有力方言（とりわけ東京方言）中心主義的でもあると思える。モーラの韻律的卓立性は、特に東京方言や京阪方言と言った日本語諸方言の「有力な」方言が強く持つ特徴であるが、その一方でモーラの卓立性がこれらの方言より低く、むしろ音節が韻律面で卓立的に観察されるような方言も存在し、このことは考慮に入れておく必要がある。日本語諸方言のうち、音節が目立って卓立的な方言としては、例えばアクセント類型では二型アクセントに属する九州南部の鹿児島方言が挙げられる（児玉 2008）。一般的なアクセント規則を見る限り、鹿児島方言アクセントにおける TBU(Tone Bearing Unit)はモーラでなく音節である、と考えられる。

次節より実例の検討に入るが、次節においては日本語（東京方言）において観察される様々な音韻現象に触れ、それぞれの現象がモーラと関連しているか、または音節と関連しているかを検証する。拙稿における観察の限りでは、日本語東京方言においても、モーラと関連した音韻現象、及び音節に関連した音韻現象が、相互排除することなく併存しているのが見て取れる。

4. モーラと関連する現象 1：複合語省略

4.1. カタカナ語における省略形態 (2 モーラ+2 モーラ)

日本語における単音節 (1 モーラ) と長音節 (2 モーラ以上) の違いは、まず第一にその音韻的長さであり、日本語の1音節には、その音韻的長さにおいて、1 ないし 4 モーラ程度の多様性がある。音節の「音韻的長さ」は日本語における長大語の省略形態の形成と関係しており、特に近年になって欧米諸言語から借用された長大な複合語 (カタカナ語) における省略と関係が深い。なお漢語の省略規則はカタカナ語のそれとは異なるので、ここでは詳しく触れない。カタカナ複合語の省略においては、それぞれの省略形態は1 ないし 2 モーラ程度になる傾向がある (ただし 1 モーラ+1 モーラの省略形態は稀少) が、例えば省略形態が 2 モーラであるとき、それは「1 長音節」であるかも知れないし、「2 短音節」であるかも知れない。つまり「2 モーラ」のカタカナ語省略においては、「1 長音節」と「2 短音節」が等価として扱われており、音節数は考慮されない。

(4) カタカナ複合語省略 (2 モーラ+2 モーラの場合)

(i) 1 音節+2 音節

- a. ハン-スト/*ハンガ-スト <ハンガー-ストラ]イキ
- b. ワー-プロ/*ワード-プロ <ワード-プロセ]ッサー

(ii) 2 音節+1 音節

- a. ファミ-コン/*ファミ-コンピユ <ファミリー-コンピユ]ーター
- b. サバ-ゲー/*サバ-ゲーム <サバイバル-ゲ]ーム
- c. レッ-チリ/*レッド-チリ <レッド-ホット-チリ-ペ]ッパーズ

通常、促音終わりの単語は日本語において許容されない (外国語の転写において、単語末入破音など日本語にない特殊な音の表現に、単語末の促音が用いられることはありうる) が、省略形態では、それが単語末に来ない限り、促音終わりが可能である。

(iii) 2 音節+2 音節

- a. アメ-コミ <アメリカン-コ]ミック

4.2. 省略形態のバリエーション: 「2 モーラ+2 モーラ」 以外の場合

前節では「2 モーラ+2 モーラ」からなる省略形態に限定して論考したが、すでに述べたように、複合語省略は必ずしも「2 モーラ+2 モーラ」のみを選好するとは限らず、「2 モーラ+2 モーラ」以外にもいくつかの異なるモーラ構造を持つ組み合わせが可能である。しかも、いずれの省略形態においても、一貫してその長さは音節数によっては規定されない。下にいくつか例を挙げる。

(5) 複合語省略 (Ito 1990 に基づく)

(i) 1 モーラ+1 モーラ (稀少)

- | | | |
|----|-------------|-------------------|
| a. | モ]ーボ/*モ-ボー | <モダン-ボ]ーイ |
| b. | モ]ーガ/*モ-ガー | <モダン-ガ]ール |
| c. | ベ]ーア/*ベー-アッ | <ベース-ア]ップ |
| d. | ラ-テ-カセ | <ラジオ-テレビジョン-カ]セット |

a-c において、省略形態はその「1 モーラ性」を完備するために、省略前の形態の音節連続を切断している。このような現象は「1 モーラ省略形」の形成にあたって広く観察される。

(ii) 2 モーラ+1 モーラ

- | | | |
|----|--------------|--------------|
| a. | スマ-ホ/*スマ-ホン | <スマート]ーホン |
| b. | テ]レ-カ/*テレ-カー | <テレホン-カ]ード |
| c. | リ]ス-カ/*リス-カッ | <リスト-カ]ット |
| d. | プラ-モ | <プラスチック-モ]デル |

(iii) 1 モーラ+2 モーラ

- | | | |
|----|---------------|------------------|
| a. | メ-アド/*メー-アド | <メール-ア]ドレス |
| b. | ネ-カフェ/*ネッ-カフェ | <(インター) ネット-カ]フェ |
| c. | ラ-ノベ/*ライ-ノベ | <ライト-ノ]ベル |

簡単にまとめると、まず省略形態のうち「1 モーラ+1 モーラ」パターンは、現代日本語の一般的な使用状況において不可能ではないものの、非常に稀少である。しかもこのパターンの省略形態は、おおむね会話から生まれたものではなく、むしろ主として新聞や雑誌

などと言った（記述において尺の長さが常に問題となる）伝統的な文字メディアにおいて形成されてきたように思われる。そのためか「1 モーラ+1 モーラ」パターンは現代日本語においては古風・書き言葉的と見なされる傾向があり、このパターンに属する多くの省略語は一般的には使われなくなっている。また、このパターンに属する新単語が創造されることも稀である。

その一方で、「2 モーラ+1 モーラ」および「1 モーラ+2 モーラ」パターンは、現代の新しい日本語においても盛んに用いられており、また創造されてもいる。先述の「1 モーラ+1 モーラ」パターンとは異なり、これらのパターンには一般に古風さは感じられず、日常会話、及びインターネットなど新しい文字メディアにおいて積極的に用いられる傾向がある。インターネットにおける俗語・隠語には多数の「2 モーラ+1 モーラ」或いは「1 モーラ+2 モーラ」パターンが観察される。

4.3. 複合語省略とフット

複合語省略に関して、先行研究（Ito 1990, Ito and Mester 1992 など）は複合語の省略形態は多くの場合「2 フット（2 モーラ+2 モーラ）」からなる基本形を持つ、と論ずる。たしかに「2 モーラ+2 モーラ」形態が現代日本語におけるカタカナ語省略の中ではとりわけ良く用いられ、また造語されてきた、という事実は否定できない。しかしながら筆者は、この見解は現代日本語における最も新しい日本語の使用状況を、必ずしも十分に反映するものではないと考える。

「2 フット形」に対する「2 モーラ+1 モーラ」および「1 モーラ+2 モーラ」といった「非 2 フット形」は、基本的には「2 フット形」よりは登場が新しいものと思われる。けれども「非 2 フット形」の略語は、現行の日本語においては「2 フット形」には及ばないかも知れないが多数であり、「非 2 フット形」はまた「2 フット形」と同等程度に積極的に使用され、創造されている。略語におけるフット説は、なぜ現行の日本語において「非 2 フット形」が「2 フット形」と同様に好まれる傾向を持つのかを説明できない。「1 フット+1 フット」パターンの略語は、フット説では排除されなければならないが、少数ながら存在している。上に紹介した全てのパターンにおいて共通しているのは、日本語（カタカナ語）における省略形態の長さを規定するのは、モーラであり、音節やフットではない、ということである。

いくつかのケースでは、2 モーラの省略形と 1 モーラの省略形がお互いに排除し合うことなく共存している、と言うことが有りうる。(例：メアド vs.メルアド) これらの共存ケースにおいては、多くの場合、1 モーラ形は 2 モーラ形よりも新しく出現したと考えられる。例えば、メアドとメルアドの例においては、おそらくメアドはメルアドよりも新しいであろう。ともかく現行の日本語において、非 2 フット形の省略形態も 2 フット形のそれと同様に、広範に存在し、使用され、また新たに出現してもいる、と言うことは確かな事実である。

4.4. 外国語における略語形成：ドイツ語の場合

ドイツ語は単語レベルのアクセントにおいて、英語と似た点が多い。ドイツ語は英語と同様のストレスアクセント体系を持ち、強母音と曖昧母音の区別を持つ。また強勢位置の違いにもとづく単語弁別が可能である。典型的には、特にゲルマン祖語に由来する単語ないし早い時期に借用されたスラヴ・ラテン・ギリシャ系の単語において、最初の強母音を含む音節が最も強く発音される(例：*BAden*, *GRENze* (境界), *BIbel*) が、より新しい借用語ではこのアクセント規則は必ずしも当てはまらない(例：*LeGENde*, *EnerGIE*)。リズム類型では、ドイツ語はやはり英語と同様のストレスリズム言語に属すると見られる。

ドイツ語には英語でも一般的な頭字語のほかに、それほど多数ではないが、単語を直接縮約することによる省略法が存在する(例：*Gestapo* (<*GEheime STAatsPOLizei*))。ドイツ語の「直接縮約による単語省略」は、日本語におけるそれと同様に音節連続を切断することができる。これは *Geheime Staatspolizei* の省略において **Gestaatspo* が不可能であることから容易に理解されよう。他の例をいくつか挙げる。

(6) ドイツ語における略語

- | | |
|--|---------------------------|
| a. <i>Ba-wü</i> / <i>*Ba-wür</i> / <i>*Ba-würt</i> | < <i>BAden-WÜrtemberg</i> |
| b. <i>Ja-bo</i> / <i>*Jag-bo</i> / <i>*Jagd-bo</i> | < <i>JAgdBOMber</i> |
| c. <i>Sta-si</i> / <i>*Staa-si</i> / <i>*Staats-si</i> | < <i>STAatsSIcherheit</i> |
| d. <i>Kri-po</i> | < <i>KRIIminalPOLizei</i> |

日本語とドイツ語の例を見る限り、音節・モーラ構造の類型に関わらず、一般に略語に現れるような単語の省略形が音節連続を切断することは、さほど稀ではないように思われる。そもそも略語が発生する理由は、まず第一義的には、発音や記憶が困難な長大単語を避けるためなのであろうから、ドイツ語のように単語の単音節性が強く、1音節が長大になりがちな言語では、単語の省略形が音節連続を切断するのは、十分にありそうなことではある。ドイツ語における単語の省略形態は、恐らく基本的には「子音（クラスター）＋長母音」の形を取り、しかも2モーラを下回ることは無いであろう¹。

このように、日本語とドイツ語の単語省略、及びその最小規則については、一定の類似性が見られるものの、その一方で相違点も少なくないように思われる。先に述べたように、日本語における省略形態の長さは、原則的にはモーラによって規定されている。しかしながら、ドイツ語においては、必ずしもモーラが強力に省略形態の最終結果を束縛する訳ではなく、例えば「2モーラ」の子音クラスターが省略形態として単語の実現形に採用されることは無い(例：*Kri-po* / **Kr-po*)。このように、単語の省略形態を規定する規則については、言語ごとに違いがあり、それゆえ単語省略のありようについては、類型論的見地からの問題提起も可能であるが、この議論は今後の研究に譲ることとする。

5. モーラと関連する現象2：言い間違いと吃音

現代日本語における複合語省略規則以外のモーラ関連現象として、日本語母語話者による日本語の言い間違い及び吃音について挙げる。窪菌(1998)が報告するように、日本語母語話者の言い間違いは音節レベルよりむしろモーラレベルで起こる傾向があり、この事実は日本語における発話構成及び知覚の基本単位は音節でなくモーラである、ということをも同時に示唆している。同研究によれば、モーラレベルの言い間違いは、ヨーロッパ語ではほとんど見られないという (Kubozono 1989, 1996)。さらに興味深いことに、日本語のモーラはまた吃音における言い間違いにも関連している。Ujihara & Kubozono (1996)の報告によれば、吃音のある日本語母語話者は日本語の名詞 *san.ma* を *sa sa sa sa san.ma* のように発音する傾向が強く、*s s s s san.ma* や *san san san san san.ma* のような発音は稀であるという。一方で英語の吃音においては最初の子音（分節音）の繰り返しが最も普通に見られる (窪菌 1998)。

¹ *Gestapo* における第1音節は、曖昧母音を含む1モーラ音節[ga-]であるが、これは当該音節がもともと曖昧母音を含む1モーラ音節に由来するからである。

(7) 日本語母語話者による言い間違い (窪 蘭 1998 に基づく)

- a. ケチャ] ップ > チャケツプ / *tyap.ke.pu
- b. テッキンコンクリ] ート > コッキンテンクリート /
*kon.kin.tek.ku.rii.to
- c. サンザカ (山茶花) > サザ] ンカ² / *za.san.ka

(8) 吃音 (窪 蘭 1998 に基づく)

- a. スルメ > ス、ス、ス、スルメ
- b. サンマ > サ、サ、サ、サンマ
- c. サッカ (作家) > サ、サ、サ、サッカ
- d. サ] ープ > サ、サ、サ、サ] ープ

6. モーラと関連する現象 3 : 音節区分けと音調

6.1. モーラと形態変化現象

前節では主に先行研究の挙げてきた例をもとに、日本語のモーラレベルにおいて実現する音韻現象について見てきた。拙稿は日本語におけるモーラの存在、及びその役割については肯定的な立場を取り、先行研究の挙げる例は、拙稿のかかる立場を支持するものである。しかしながら、先行研究において言及されている論拠の問題点は、それらが往々にして日本語アクセントにおいて普遍的に実現する音韻現象ではなく、むしろ単語形態の変形に関わる偶発的な現象に過ぎないことである (吃音も広義の単語変形と言うことはできよう)。例えば、確かに日本語における単語の省略形態の長さは、一般に音節でなくモーラによって規定されていると見られるが、省略は常に可能である訳ではなく、また常に唯一の (同一モーラ数、同一音素からなる) 実現形を持つ訳でもない。本節においては、普遍的なアクセント特徴を形態特徴より重視する拙稿の立場から、日本語におけるアクセント特徴の中で、モーラと深く関連する現象が見られるかどうか、が主要な論点となる。

6.2. 音節区分けとアクセント

² サザンカはもともと (モーラレベルの) 言い間違いに由来するものであるが、現代日本語においては唯一の規範形となっている。元来の規範形であった*サンザカは現存しない。

日本語における単語アクセント（ピッチアクセント）の実現は、単語の音節区分け（syllabification）と深く関連していると見られる。実際の発話において、音節区分けと関連が深い韻律的事象としては、例えば発話速度（speech rate）が挙げられるが、これは既に Kleinhenz (1999) がドイツ語において指摘するところであり、同様の現象はおおむね洋の東西を問わず観察されうる、と言えよう。

伝統的な日本語韻律研究においては、日本語のピッチアクセントは段階声調とされ、単語内のすべてのモーラが L（低ピッチ）ないし H（高ピッチ）いずれかの音調を有するとされる。例えばカ]ラス（烏）のピッチ実現を段階声調的アクセント観に基づいて記述すれば H]LL となり、一方ガラスのピッチ記述は LHH となる。このように、日本語における単語レベルのピッチアクセントは、一般に（音節ではなく）モーラ単位で決定されている、と言うのが従来の日本語アクセント観である。従来の日本語アクセント観においては、そもそもピッチアクセント現象それ自体が、モーラと不可分の韻律的結びつきを有している、と言うことができる。

しかしながら日本語における単語レベルのピッチアクセントは、単語内のすべてのモーラに対して、常に音声学的に厳格な 1 対 1 対応を要求する訳ではないと思われる。例えば実際の発話においては、個々の音調がより「音節」に付与されているかのような韻律実現も可能であろうし、また逆に、個々の音調が厳密に「モーラ」に対応するような韻律実現も可能であろう。このように実際の発話において、音調が厳密にモーラに付与されるどうかは、恐らく発話速度に応じて変化しうる。一般的には、発話速度が遅いほど、単語レベルのピッチアクセントにおける個々の音調はより忠実にモーラに付与されやすい傾向がある、と見られる。本節ではこの問題を日本語における「モーラ分断発音」に言及しながら検証する。日本語では、話者の強い強調や言い募りなどを表す場合に、発話（ないしその一部、単語など）中に出現するモーラを、声門閉鎖で分断しながら発音することが可能であり、これを最低の発話速度と解釈する。

(9) モーラ分断発音

- | | | | |
|----------|---|------------|--------|
| a. カ]ラス | > | カ?]ラ?]ス! | H]L[H |
| b. ガラス | > | ガ?]ラ?]ス! | LHH |
| c. コ]ーモリ | > | コ?]ー?モ?]リ! | H]LL[H |

d. チョコレート > チョ?コ?レ?]ー?[ト! LHH]L[H

(9)a,c,d において起こる上昇調 ([I] はイントネーション句末における境界音調である。句末が高音調である場合には高音調化は(少なくとも必然的には)起こらない。

このような音韻現象が起こるのは、日本語においてモーラと言う音韻単位が普遍的に存在し、それが実際の発話に影響を与えうるが故であろう。どちらにせよ、かかる現象は「起こるか起こらないかが語彙的に決定される(あるいは決定されがちである)」ような現象ではなく、純粋に発話速度の問題であり、日本語における韻律に対して一般的に適用可能であることは確かである。

更に、ここで確認しておきたいことは、発話速度最低の状況における発音(モーラ分断発音)は、一般には上に挙げたようなピッチ実現以外の韻律を許容しにくい、ということである。つまりここでは、「発話における個々の音調が厳密にモーラに対応するような韻律」が、まさに実現している訳である。例えばコ]ーモリは、通常の発話状況ではコー]モリないしそれに近い発音も可能であろうが、モーラ分断発音においては、コ?]ー?モ?]リ! に対する*コ?]ー?]モ?]リ! はほとんど不可能であろう。もちろん、ここで挙げた例は、あくまでも発話速度最低の状況、即ちモーラ分断発音における例に過ぎない、と言う点には十分に注意が必要である。既に述べたように、モーラ分断を伴わない通常速度の発話においては、日本語の単語アクセント音調(L ないし H) は必ず特定モーラ上の特定時点に付与される、と言う前提は存在しえない。であるから、通常の発話状況においては、コ]ーモリに対するコー]モリないしそれに近い発音も可能と考えられるのである。

拙稿が依って立つところの前提とは、むしろ先述の発話速度など、個々の単語に内在しない外部の条件に応じて、アクセントの付与位置や付与単位は「可変的である」ということであり、これは「モーラレベルの段階声調」という伝統的な日本語アクセント観とは一線を画するものである。音節に関する議論は次節において詳細に行う。

7. 日本語における音節の役割

前項までに見てきた音韻的事実を鑑みれば、確かに日本語は多分にモーラリズム的な韻律・音韻類型を有しており、逆に音節リズム的な韻律類型からは遠いように見える。それ

では実際に、Labrune (2012)などの先行研究の論ずるように、日本語における音節の役割とは小さなものであって、我々は日本語韻律・音韻研究にあたっては、音節ではなくモーラにこそ注目すべきなのだろうか。拙稿はその考えは採らず、一貫して日本語に音節は一般的に存在するとの立場に立つ。

確かに日本語の音節は、ヨーロッパ語や日本語の近隣諸言語に比べれば、(知覚上モーラが卓立的であるが故に) 目立って知覚されるような役割は少ないかも知れない。またこれらの言語に比べ、日本語はより厳格なモーラ「リズム」による等時性をも具有しているであり、この観点からは日本語は明確に「モーラリズム言語」の一種とすることができる。しかしながら、日本語が実際に音節に対する考慮を必要としないような言語であるのかどうかは、まだ断定するには至らず、また拙稿は結論としてそれを断定することもしない。次節においては、本節とは逆にモーラよりむしろ音節との関連性が深いと思われる音韻・韻律現象を示し、個々の事例について検証を行う。

8. 音節と関連する現象 1: 句頭の LH 音調

8.1. 音節と音韻現象

前節において示された事実にも関わらず、日本語における音節もまたモーラと同様、いくつかの独自の韻律的機能を具備している。既に述べたように、拙稿は日本語において音節とモーラは相互排他的ではなく、むしろ基本的に共存可能であるとの立場に立っているので、これは驚くには当たらないことのように思われる。では日本語においてモーラよりむしろ音節と深く関連する音韻・韻律現象の中には、一体どのようなものがあるのだろうか。

8.2. 単語アクセントとモーラ・音節

日本語において、音節と密接に関連する音韻・韻律現象としては、例えばピッチアクセントが挙げられる。確かに、一般には日本語（東京方言など）のピッチアクセントは、音節レベルでなくモーラレベルで決定されている、とされている。伝統的には日本語東京方言のピッチアクセントにおける TBU は、一般にモーラであるとされてきた。しかしながらこれには異論があり、例えば日本語東京方言のピッチアクセントにおいては、むしろ音節との関連性が深いと見られる現象も観察される。事例については本論で詳しく述べるが、本論に入る前にまず日本語（東京方言）の単語アクセント体系を概観しておきたい。

日本語（東京方言）の単語アクセントは、先述したように「下がり核が有るか無いか」「もし有ればどこに有るか」を区別する位置アクセントであり、下がり核の有無に従って「有核型」および「無核型」アクセントに大別される。日本語諸方言のうち最も古いアクセント体系を保持するとされる京阪方言は、単語中の下がり核の有無（位置アクセント）に加え、単語頭が高ピッチで始まる（高起式）か低ピッチで始まる（低起式）かが弁別される、という一種の「語声調」を有するが、東京方言は語声調を有さない単純な位置アクセント方言である。

(10) 日本語（東京方言）における単語アクセント

a. 下がり核の有無・位置による語弁別

ハ]シガ（箸）、ハシ]ガ（橋）、ハシガ（端）

b. 音調付与単位：モーラか音節か

ビ]ール、レ]ンジ、ロ]ッジ vs. ビー]ル、レン]ジ、ロッ]ジ

(10)a-b における下がり核の位置は金田一『新明解日本語アクセント辞典』（2010）に準ずる。アクセント辞典による記述では、（また伝統的な日本語アクセント研究の見地からも、）日本語の単語アクセントにおける音調及び下がり核の付与単位は、「音節ではなくモーラ」であるように見える。

仮に日本語単語アクセントにおけるアクセント現象の付与単位が「モーラでなく音節」であるとすれば、例えばビー]ルに対するビー]ルは、モーラの位置の相違に関わりなく、「第1音節」にアクセント核を有しているがゆえに、許容されるはずである。しかしながら金田一(2010)においては、ビ]ールに対するビー]ルのような、音節末アクセント核の存在、及びその可能性は言及されていない。この点において金田一(2010)における記述は、日本語単語アクセントにおけるアクセント現象の付与単位が、音節ではなくモーラであることを、事実上前提としている、と言えよう。では日本語の単語アクセントはモーラレベルで決定されており、そこには音節が関与する余地は無い、と判断するべきだろうか。

8.3. 短音節で始まる単語 vs.長音節で始まる単語

日本語のアクセント現象は純粋にモーラ単位で起こる、と言うアイディアに対する反例として、日本語東京方言における句頭³の音調と音節の関係について検証したい。東京方言において、句頭の2モーラが2つの短音節からなり、しかも単語アクセント型が頭高でないような場合、第1モーラは低ピッチ(L)、第2モーラは高ピッチ(H)で実現する(例:モクジ LHH)。しかしながら非頭高の単語アクセントにおいて、句中の第1・第2モーラが1個の長母音で構成される場合、同モーラが2個の短母音で構成される場合に比べて、LHのピッチ差は小さい。そのため句頭のピッチパターンはよりHHに近い音調として知覚される(例:ページ L^HH)。

筆者は、ここに現れるピッチパターンを、厳密に音声学的なHH(高平調)と定義してよいとは考えない。しかしながら、日本語熊本方言(九州中部で話される、いわゆる無アクセント方言の1つ)を母語とする筆者の自省する限りでは、「意識的に」句頭長音節をHH、またはそれに近い音調によって実現させることも不可能ではないように思われる(ページ HHH)。一方、「意識的なHH音調」は、句頭が2短音節からなる場合には不可能である(モクジ LHH/*HHH)。どちらにしても、句頭が1長音節で始まる場合においては、句頭が2短音節で始まる場合に典型的にみられるようなLH音調とは異なる音声実現が現れるのは間違いないだろう。

なお東京方言の句頭においては、「短音節始まりかつ非頭高」の場合であっても、第1モーラは短い上昇調(拍内上昇)となる、との見解もある。これを「長音節始まりかつ非頭高」の場合にまで敷衍すれば、東京方言においては「句先頭音節の終了までにピッチ上昇(音節内上昇)が完了し、次の音節は高音調となる」とまとめることができる。句中の第2モーラが促音である場合であっても、この原則は有効である。第2モーラが促音である場合も、句頭のピッチ上昇は第2モーラ終了までに完了し、第3モーラは高音調となる(例:ラッパ)。ただし、この場合は、句中の第1音節が長母音音節ないし鼻音終わり音節である場合とは異なり、句先頭音節は低く始まる。後続する高音調とのピッチ落差は大きい。

8.4. 拍内上昇と音節内上昇

³ 川上(1957)は句頭に起こる音調を「句音調」と呼び、単語でなくその上位単位である句(発話において切れ目の感じられる単位)に固有の韻律現象である、とする。句頭のLH音調はまた、句の韻律的末端を明示する機能をも果たしているであろう。

日本語ピッチアクセントにおいては、伝統的には段階声調としてのアクセント観に基づいて、ピッチの拍内変動、曲線音調を考慮することなく、LH という 2 つの記号によって「段階」のみを記述する、という表記方法が広く行われてきた。けれども筆者は日本語ピッチアクセント及びその記述において、ピッチの拍内変動・音節内変動は等閑視されるべきではないとの観点から、段階声調に基づく従来の日本語アクセント観には疑義を呈してきた。既に示したように、日本語ピッチアクセントにおけるピッチの拍内上昇、および音節内上昇は実際に観察可能であると考えられ、とすれば、ピッチ段階のみならずピッチの拍内・音節内上昇をも表記しうる記号体系が必要となってくる。そこで従来の LH による記号体系を改め、上昇調を R、平板調を Lv、下降調を F とし、上に示した句頭上昇調と音節の関係とを表現してみることにする。

(11) 句頭上昇調

- | | | |
|----|--|--|
| a. | (モ) _σ (ク) _σ (ジ) _σ | (R) _σ (Lv) _σ (Lv) _σ |
| b. | (ペー) _σ (ジ) _σ | (R) _σ (Lv) _σ |
| c. | (ラッ) _σ (パ) _σ | (R) _σ (Lv) _σ |

(12) 句頭におけるピッチ上昇規則

- > アクセントが頭高でないとき、
- 上昇調(R)は句先頭音節終了までに完了する。
 - 句の 2 モーラ目が長母音または鼻音である場合、句先頭音節は比較的高ピッチであり、R 音調（従来の LH 音調）におけるピッチ上昇幅は小さい。
 - 句先頭音節が短母音（1 モーラ）である場合、または句の 2 モーラ目が促音である場合、句先頭音節は比較的低ピッチであり、句頭の R 音調におけるピッチ上昇幅は大きい。
 - 句先頭音節が短母音である場合に観察される拍内上昇は、本質的には音節内上昇と等価である。

9. 音節と関連する現象 2：下がり核位置の揺れ

9.1. 日本語の単語アクセントは、モーラレベルで決定されているか

一般的な理解では、日本語の単語アクセントは語ごとに決定されている。しかも、もし単語中に下がり核が存在する場合、その位置はモーラレベルで決定されている。金田一『新明解日本語アクセント辞典』(2010)におけるアクセント記述も、このようなアクセント観に基づいて為されている。

実際に日本語の単語アクセントがモーラレベルで決定されているとすれば、例えば「ビール」においては、前述の如くビ]ールが唯一の可能性であり、一方、ビー]ルのような下がり核実現は不可能である、と考えられる。しかしながら日常的かつ十分に流暢な会話においては、ビー]ルまたはそれに近いような下降調位置の揺れが、しばしば観察されるように思われる。以上の仮説に基づき、筆者は日本放送協会のインターネットサイトより3種類の発話データを採取し、計25例の長音節を得た。拙稿が着目したのは長音節のうち特に長音終わり、及び鼻音終わりの長音節であり、これらの長音節について、下降調の有無及びF0曲線の下降の有無について検証を行った。促音終わりの長音節は下がり核の位置を把握しづらく、かつF0曲線の途絶が起こりやすいため、また二重母音を含む長音節はしばしば母音連続を含む長音節と区別しづらいため、今回は検証の対象から除外している。

3種類の発話データは、同サイトより採取した2つのニュースに基づく。2つのニュースはそれぞれ女性アナウンサー及び男性アナウンサーによりアナウンスされており、それぞれをF1、M1とする。3種類の発話データのうち、1つは女性アナウンサーによるニュースのアナウンス(8例)であり、他2つはそれぞれ男性アナウンサーによるニュースのアナウンス(13例)、及び一般女性(F2)による証言の録音(4例)である。なおF2による証言の録音はM1のアナウンスによるニュースの中に含まれる。F2は東京女子師範学校附属幼稚園(現・お茶の水女子大学附属幼稚園)の教諭、及び昭和天皇の皇孫教育御用掛としての職歴を有しているが、東京方言において非規範的と思われる下がり核位置が実現した場合は考察より除外した。F2の発話データより採取された長音節は少ないが、アナウンスとの対照上参考となりうると考え、拙稿でも紹介することにした。音声データの録音は筆者所有のPC(Mac OS X、バージョン10.5.8)内蔵のマイクにて行った。データ編集は音声解析ソフトPraatによる。拙稿は、上の発話データより採取した長音節を(知覚の上での)下降調の有無およびF0曲線の下降の有無に従って4つに分類し、長音節データがそれぞれの分類に属するか検証を行っている。以下に拙稿が採取した長音節データの一部(アノテーション)を示す。

A F1によるアナウンス (全8例)

- 1 コー]シャノ (-下降調、+F0 下降)
- 2 キュー]ジューハチマイ (-下降調、+F0 下降)
- 3 ケンゾー]ブツ (-下降調、+F0 下降)
- 4 ソ]ーサシテイマス (+下降調、+F0 下降)

-下降調、-F0 下降	6 例
-下降調、+F0 下降	1 例
+下降調、-F0 下降	0 例
+下降調、+F0 下降	1 例

B M1によるアナウンス (全13例)

- 1 セー]フ[ヨー]ジンラ]オ (-下降調、-F0 下降)
- 2 ヨン]ジュー]ネン (-下降調、+F0 下降)
- 3 ショー]ゲ]ンオ (+下降調、-F0 下降)
- 4 セー]ネン]ショ]ー]コー]ラガ (+下降調、+F0 下降)

-下降調、-F0 下降	3 例
-下降調、+F0 下降	3 例
+下降調、-F0 下降	5 例
+下降調、+F0 下降	2 例

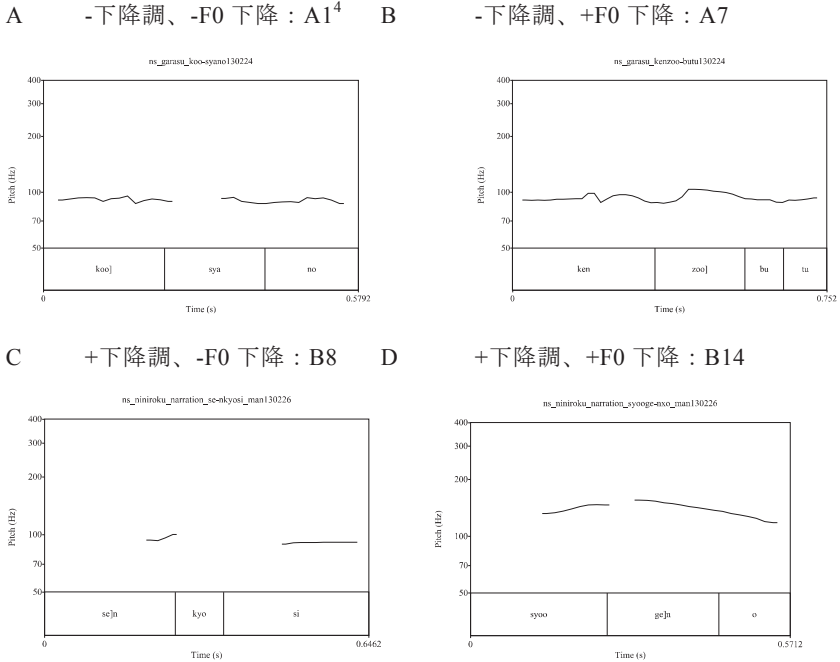
C F2による発話 (全4例)

- 1 スワッ]テン]デ]スカ]ラ[ネ]ー (-下降調、-F0 下降)
- 2 イ]タン]デ]ショ]ー[ネ]ー (-下降調、+F0 下降)
- 3 キー]テル]ン]デ]ス]ヨ (+下降調、+F0 下降)
- 4 ソ]ー]ダ (+下降調、+F0 下降)

-下降調、-F0 下降	2 例
-下降調、+F0 下降	0 例

+下降調、-F0 下降 0 例
 +下降調、+F0 下降 2 例

図 1 F0 曲線の例



以上の分析からわかるように、F1 では長音節末下降調の頻度が高く（8 例中 7 例）、M1 及び F2 では長音節内下降調と長音節末下降調がおよそ半々の割合で現れる。このように、日本語東京方言において一般に規範的とされる長音節内下降調は、実際の発話において必ずしも実現するとは限らず、話者によっても頻度に違いがあることが見て取れる。また同一の話者であっても、同一の音素列において常に同一の音調が実現するかどうかは確定的でない。例えば M1 による発話データでは長音節末下降調を含むセーネンショー]コー[ラ]ガと、長音節内下降調を含むセーネンショ]ーコーラガが併存している。どちらにせよ、下がり核を含む長音節における下降調の位置において、このような揺れが発生しうる以上、日本語の単語アクセントはモーラにより規定されている、との一般論には、疑義を差し挟む余地があろう。

⁴ データ番号については後掲の付録を参照されたい。

拙稿は、下がり核を含む長音節における下降調位置の揺れ現象を、下がり核によって期待される位置より後に下がり核の位置が「ずれた」と解釈する。そして、このずれが起こりうる範囲は、音節であると考えられる。下がり核による下降調はそれを含む「音節」のどこかで（あるいはほとんど音節終了後に）起こる、と考えれば、上の現象をうまく説明できるからである。逆に、音節を越えて下がり核が移動することは無い。故にハ]シ（箸）ガとハシ（橋）]ガが混同されることは無く、またムラ]サキが*ムラサ]キと発音されるようなことも（規範的な東京方言としては）無い。

このように、もし音節内部において下がり核の位置が「ずれる」ことができるのだとしたら、（通常の発話速度における）日本語の単語アクセントは、モーラレベルではなく音節レベルで決定されており、下がり核の位置は音節内部で変動しうる、と見ることができる。

9.2. 下がり核位置のずれと韻律規則

通常の発話速度において「日本語の単語アクセントはモーラレベルでなく音節レベルで決定されている」という前提を利用して、さらに他の韻律現象に統一的な説明を与えることができる。例えば窪菌(1998)は、日本語の外来語アクセント規則として、「語末から数えて3モーラ目」に下がり核が置かれる、とする。この規則には例外が多く、また単語のアクセントは常に変動する可能性を持っているので、この規則がどこまで有効であるのかは、疑問の残るところであるが、少なくともある程度の正当性は有していると筆者は判断する。

(13) 外来語アクセント規則1（窪菌 1998 に基づく）

＞ 語末から数えて3モーラ目に下がり核を置く。

a. 下がり核以後に特殊拍を含まない

ビ]ルマ、オースト]リア、オーストラ]リア、ロサンゼ]ルス

b. 下がり核以後に特殊拍を含む

デンマ]ーク、アイルラ]ンド、アントワネ]ット、アンデル]セン⁵

以上は「単語中の下がり核が予期される位置（語末から数えて3モーラ目）に特殊拍が無い」場合であった。では下がり核が予期される位置に特殊拍が有り、前述のアクセント

⁵ アンデル]センも可能。（金田一 2010『新明解日本語アクセント辞典』）

規則を当てはめると特殊拍に下がり核が付与されてしまう（これは規範的ではない）ような場合は、どうなるであろうか。窪菌(1998)はこのような場合についても言及している。同研究は、もし前述のアクセント規則において下がり核が予期される位置に特殊拍が存在する場合、下がり核の位置は1つ前のモーラに移動する、とする。

(14) 外来語アクセント規則2（窪菌 1998）

> もし「語末から数えて3モーラ目」に特殊拍が存在する場合、下がり核の位置は1つ前のモーラに移動する。

ワシ]ントン、コペンハ]ーゲン、サ]イパン、ブリュ]ッセル

この2つのアクセント規則に統一的な説明を与えるために、窪菌(1998)は、外来語の下がり核は典型的には語末から数えて「3音節目」に存在する、と説明している。上の2つの規則は、結局次の1つの規則に集約されることになる。

(15) 外来語アクセント規則

> 語末から数えて3音節目に下がり核を置く。

(i) 語末から数えて3モーラ目が独立拍、かつ

a. 下がり核以後に特殊拍を含まない

ピ]ルマ、オースト]リア、オーストラ]リア、ロサンゼ]ルス

b. 下がり核以後に特殊拍を含む

デンマ]ーク、アイルラ]ンド、アントワネ]ット、アンデル]セン

(ii) 語末から数えて3モーラ目が特殊拍

ワシ]ントン、コペンハ]ーゲン、サ]イパン、ブリュ]ッセル

筆者が「下がり核の位置は音節内部で変動する」と考える理由も、またここにある。筆者は音節内部で移動するのは下降調の位置やタイミングではなく、実際に下がり核それ自体であると考え。確かに、仮に下降調の位置またはタイミングが、本来予想される位置よりも後方にずれて実現されたとしても、それは下がり核位置の変異ではなく、単に下降調が始まるタイミングの変異に過ぎないかも知れない。そもそも下がり核とは下降調それ自体を指すのではなく、下降調を駆動する要因でしかない。

しかしながら(14)で挙げた例を見ると、外来語アクセント規則 1 によって予測される下がり核が、伝統的に非規範的とされる音節末に付与される（例：*ワシン]トン）のを防ぐため、実際に、この場合は後方でなく前方であるが、移動しているのがわかる。このように、日本語における単語の音節構造には、実際に下がり核を近隣モーラの方向へ押しやる力があり、またこの力に従って、下がり核の位置は予測された位置を離れて前後することができるのだ、と筆者は考える。結局(14)においては、言うなれば音節末下がり核を嫌う規範文法的な駆動力が、規範的下がり核の位置を前方へ移動させたと解釈できる。

もっとも筆者の意見では、規範形ワシン]トンの下がり核は、自身を含む音節末ないしその付近までずれることも可能であり、その場合はワシン]トンのような、外来語アクセント規則 1 におけるデフォルト形と同等、またはそれに近い実現形が実現されることになる。このように、下がり核は一定のモーラ上にあるのではなく、その位置は音節内部で変動する可能性があり、しかも下がり核は音節を逸脱することなく音節内のどこかに存在する、との前提に立てば、そもそも(13)と(14)を分けて考える必要はあまり無い。

セーネンシヨ]ーコーに対するセーネンシヨ]ーコーのような例においては、(14)とは逆方向の駆動力が働いたと解釈できるであろう。つまり、音節末または音節後方の下がり核を容認する実用面の駆動力が、規範的には音節内のモーラ間にあるべきである下がり核を、後方に移動させた、と考えられる。もちろん下がり核位置の移動は（少なくとも、規範的ではないため）必須ではなく、それ故に同一の話者であってもセーネンシヨ]ーコーに対するセーネンシヨ]ーコーの如き発音の揺れが生ずるのである。

10. モーラの非等価性と音節・フット：音韻語は何から成るか

日本語におけるモーラは、必ずしもすべて韻律・音韻的に等価という訳ではない。日本語のモーラには、単独で単語を形成できるモーラ（独立拍）と、単独で単語を形成できないモーラ（特殊拍）とがあり、特殊拍は必ずその前方に独立拍を伴っていなければならない。特殊拍は前方の独立拍と結合することで一種の「音韻的なまとまり」を作り、はじめて発話において実現することが可能となる。

日本語におけるモーラのうち、特殊拍とは、長音、促音、鼻音のいずれかであり、これ以外のモーラは独立拍である。特殊拍のうち、鼻音は独立拍の性質と特殊拍の性質を併せ

持っている。稀な例ではあるが、例えばンジャメナのような例では、単語先頭の鼻音は独立して（即ち、独立拍として）1 モーラと 1 音節を同時に形成していると考えて差し支えあるまい。一方、長音と促音は特定の音価を持たず、独立拍としては存在できない。

特殊拍が 1 単語を形成できない以上、独立拍と特殊拍を結びつけ「音韻的なまとまり」を作る機能を持つ、そのような上位の（かつ音韻語未満である）韻律単位の存在を想定することが必要となる。韻律階層理論における既存の枠組みを用いれば、それは音節であるかも知れないし、または音節を否定的な立場においては、フットであるかも知れない。独立拍+特殊拍の組み合わせが最低 2 モーラを有することから、独立拍+特殊拍が作る「音韻的なまとまり」とは（音節を認めないならば）フットである、との予測も理論上は可能である。結局日本語における音韻語はすべて、1 音節ないし 1 フット以上から成る、と言うことができよう。

では日本語においてフットは容認しうるのか、という議論が、次節における主要な話題となる。日本語においてフットの存在は十分に支持されうると判断し得ない場合は、独立拍+特殊拍が作る「音韻的なまとまり」とは蓋然的に音節である、ということになる。

11. 日本語におけるフット

11.1. 先行研究

日本語のフットに関する論考は、既に日本国内外において多くなされているが、筆者の管見する限りでは、そのうちの多くをフットに対する肯定的な（またはフットの存在を前提とする）意見が占める。とりわけ欧米の言語学者や、欧米に研究拠点を持つような日本人言語学者は、一般に日本語のフットに対して肯定的な意見を持つ傾向が強いように思われる。前に触れたが、Labrune(2012)は日本語の韻律はモーラとフットによって強く規定されており、その中で音節の果たす役割は少ない、とする。同研究は日本語において伝統的または現代的ないくつかの（言葉遊びを含む）音韻現象に触れ、同言語にフットが存在することを示唆している。Labrune (2012)の言及する音韻現象の 1 つとして、例えば「女房言葉」が挙げられる。また日本語のフットに関する議論においては、人名の愛称形を作る「-ちゃん」や、所謂ズージャ語と呼ばれる一種の倒語とそれを形成する造語規則なども、しばしば引き合いに出される。

11.2. 女房言葉

Labrune (2012)は、日本語の女房言葉は、丁寧さを示す接頭辞「お（御）」と、1 フットにまで短縮された単語の省略形態からなる、と述べる。なおフットとはもともと英語の詩学ないし韻律研究におけるリズム単位であり、基本的には強音節(s)と弱音節(w)の組み合わせからなる、と考えられている(Selkirk 1984)。現在ではフットの概念は、例えば日本語など、ストレスアクセント体系及びストレスリズムを有さない言語にも、導入されるに至っている。Labrune (2012)は、日本語のフットは2つの単音節ないし1つの長音節からなる、とする。

(16) 日本語におけるフット

- a. (C)V(C)V 2 短音節
- b. (C)VH, (C)VN, (C)VQ 1 長音節

(17) 女房言葉 (Labrune 2012 に基づく)

- a. サツマイモ <オサ]ツ
- b. ジューバコ <オジュ]ー
- c. デ]ンガク <オデ]ン
- d. ネショーベ]ン <オネ]ショ
- e. カツオ <オカ]カ

Labrune (2012)では言及されていないが、例外もある。

- f. ニギリメシ⁶ <オニ]ギリ/*オニギ
- g. ?⁷ <オム]スピ/*オムス

たしかに Labrune(2012)の挙げる女房言葉は、おおむね「お+2 モーラ省略形態」という基本形を持っているようだが、必ずしもすべての女房言葉がその形となるとは限らず、f-g のような例外が存在する。例えばニギリメシ (>オニギリ) のフット分析は、女房言葉の

⁶ 金田一(2010)によると無核であるが、筆者の自省する限りではニギリ]メシも可能である。

⁷ オニギリに対してはニギリメシという原形が存在するが、現代日本語にはオムスピに対応する*ムスピメシなる単語は存在しない。

省略規則に従ってどうなるであろうか。原則を杓子定規に適用すれば、ニギリが1フットを形成することになりはしないだろうか。f-gの如き反例を見る限り、女房言葉の前半部分は必ず2モーラ（1フット）でなければならない、という必要性はさほど大きくないように思われる。また女房言葉に限らず、また恐らく日本語にも限らず、上に挙げたような言葉遊びや単語省略において、一般に文字の影響は看過すべきでなく（例：チョコレ]ート>チョコレ]イト）、これらを純粋な音韻現象と解釈することは誤りであろう。

更に付け加えると、そもそも女房言葉には「おかもじ（髪）」など「お+（1モーラ省略形態）+もじ」というバリエーションも存在する。このことから、女房言葉（及び類似の言葉遊び）における省略形態が、常に2モーラ1フットから成る基本形を有する、または有さなければならないとは、やはり判断しづらい。「おさつ」系列の省略形態が1フットを表すなら、「おかもじ」系列の省略形態が表すのは何であろうか。もし3モーラの省略形態を基本形として要求する言葉遊びがあったとしたら、その3モーラは何を表すのであろうか。

筆者は、基本的にはこのような語彙的な現象から一般論を引き出そうとするのは、危険な試みであると考えている。ところが日本語におけるフット論では、実際のところ、語彙的現象の言及に終始する研究が少なくない。Labrune(2012)は女房言葉の他にも、愛称接尾辞「-ちゃん」やブーギャ語などにも言及しているが、いずれも語彙的現象であり、またいずれにも問題がある。

11.3. その他の音韻現象

11.3.1. 愛称接尾辞

日本語における愛称接尾辞は、Labrune(2012)の依拠する Poser(1990)による先行研究も採り上げており、前述の如く、日本語のフットを語る上では、しばしば話題となる音韻現象である。Labrune(2012)によれば、日本語の愛称接尾辞「-ちゃん」はその前半部分に人名の省略形を伴うことができ（例：ミヨコ>ミヨチャン）、これは1フット（2モーラ）を形成している、ということである。たしかに「日本語の愛称接尾辞が2モーラの省略形人名を伴う」ことは、おおむね正しいと考えられる。ただし2モーラ省略形態は語彙的に難しい例がしばしばあり、非典型的な日本人名や外国人名では2モーラ省略形態が選択されにくい。また2モーラ省略形態は、たとえ可能であっても必須ではない。

(18) 人名の2モーラ省略形態：語彙的に難しい例

(i) 非典型的な日本人名

- a. キキョー（桔梗） >??キキョチャン
- b. フヒト（不比等） >??フヒチャン
- c. サザエ >??サザチャン

(ii) 外国人名

- a. ジェームズ >??ジェーチャン
- b. マックス >??マツチャン
- c. ラ（羅） >??ラーチャン⁸

ここで重要なのは、日本語におけるフット説はおおむね「可能であるが必須ではない」音韻現象の言及にとどまり、その一方で「発話一般に適用可能な」フット規則を見いだすことには成功していない、ということである。特に、韻律階層の1段階としてのフットを考察するに当たっては、あらゆる発話に対して普遍的かつ必然的にフット分析が可能であるべきである、と筆者は考える。例えば日本語において、モーラに分析できない単語は存在しないであろう。また日本語において音節の存在を積極的に認める立場からは、音節に分析できない単語も存在し、まい。これと同様に、フット分析においても、ある場合はフット分析可能で、ある場合はフット分析不可能である、またある場合はフット分析が可能かどうかかわからない、と言うような状況は歓迎できない。このため筆者は先行研究の挙げるような語彙的現象よりも更に普遍的に実現しうる音韻現象を、韻律階層の証拠としては重視する立場を取っている。例えば英語やドイツ語には、ストレスの置かれる音節とストレスの置かれない音節との（音韻的かつ韻律的な）区別が存在し、これらの繰り返しが同言語における基本的な韻律構造を形づくっている。そしてこれらの言語においては、強弱音節の繰り返しが作る構造を一般にフットと呼ぶことができる。その一方で、日本語においては、フットと普遍的な韻律・アクセント規則とを直接に結びつける議論はあまり見られない。近年の研究では Minusa(2009)による論考が挙げられよう。

⁸ リ（李）>リーチャンは可能だが、その理由としては(i)「李」姓が日本語話者の間でも広く知られる姓であること、(ii)また「李」姓は英語読みのリー(Lee)を強く連想させること、等が考えられる。

Minusa(2009)は主にヨーロッパ語に由来する外来語彙のアクセントに着目し、最適性理論を応用しつつ日本語のフット構造をアクセント面より解明することを試みている。けれども同研究では、(グル)_Σ(ープ)_Σや(アン)_Σ(バラ)_Σ(ンス)_Σなど、音節連続を切断するフット分析がしばしば見られ、かかるフット分析はSLHに基づく韻律階層の証拠としては採用できない。このように、単語アクセント面からの日本語フット分析においては、研究者の間でも少なからぬ混乱のあることが窺われ、更に精密な議論が望まれるところである。Minusa(2009)は日本語フットについて右方からのフット分析を主張するが、フット分析がどちら側から行われるとしても、フット主要部に特殊拍を含むと言うSLH違反から逃れることはできない。

11.3.2. 例語とフット構造

もともと音楽業界の隠語と言われる所謂ズージャ語は、「2 モーラ+2 モーラ」の基本形を持つとされ、例えば先行研究(Poser 1990)では「シーマー (<飯)」のような典型的な例の他、「シーパー (<パン)」等という、日本語の規範的な音素配列規則を全く無視した例が報告されている。このように、ある言語における言葉遊び現象はしばしば伝統的な文法規範に対するルール破りを行うことがあり、しかもルール破りは意識的に行われることもある、と言う点には注意が必要である。であるから、例えばある言語において現れる言葉遊び現象、及びそこに現れる音韻現象が、その言語全体に適用可能な規則性を持つとは断定できない。前出の例と同じくズージャ語に由来する(と思われる)「クリビツ (<ビックリ)」のような例では、もともとの単語の音韻構造のみならず、文字の影響もまた多大であると見てよいであろう。

このように、ズージャ語もまた純粋な音韻現象と見なすのは難しく、ズージャ語に典型的に見いだされる「2 モーラ+2 モーラ」構造と、純粋な音韻的単位であるフットとを関連づけてよいものか、筆者は躊躇いを禁じ得ない。なおズージャ語は盛んに使用及び造語された期間のきわめて短い言葉遊び現象であり、現在(21世紀初頭)ではズージャ語の使用及びズージャ語的な造語はほとんど行われなくなっている。現行の日本語においては、「ネタ (<種)」などズージャ語に由来する(と思われる)少数の単語が残っているのみである。

なお、一見して明らかなように、「ネタ」はズージャ語(または類似の言葉遊び)に由来する可能性があるものの、ズージャ語の基本形とされる「2 モーラ+2 モーラ」の形態を有

しておらず、原則により推定される*ネーターなる形態は現行の日本語では使用されない。ここに、なぜレギュラーであるはずの形態が現行の日本語において存在せず（あるいは存在したが使用されなくなり）、かつイレギュラーであるはずの形態が生き残ったのか、という疑問が残る。そもそも、ズージャ語及び類似の言葉遊びにおける倒語は、およそ例外無く「2 モーラ+2 モーラ」であったのだろうか、あるいは、そうある必要があったのだろうか。ズージャ語及び類似の言葉遊びにおける倒語が必ずしも「2 モーラ+2 モーラ」を要求するものではなかったとすれば、なぜ*ネーターが現行の日本語において生き残らず、イレギュラーであるはずのネタのみが生き残ったのか、という疑問に対し、シンプルな答えを与えることができる。またズージャ語とフットとの関係には更に疑問符が付くことになる。

11.4. 1 モーラ単語が許容されるかどうか

筆者はフットがすべての言語に存在する、または存在しなければならない、との立場には立たない。フット構造が普遍的かつ明瞭に観察される言語もあり、またそうでない言語もあると思われる。より一般的に言って、韻律階層はそもそも完全なランゲージ・ユニバーサルでは無く、個々の言語についてその韻律階層を論じるに当たっては、同時にその言語に個別的な階層が存在する可能性があることをも、あらかじめ想定すべきであろう。例えば Nespor & Vogel (1986)において提案された韻律階層の1つである Clitic Group は、現在では多分に言語個別性が高いと見られており、ランゲージ・ユニバーサルとは言いがたい。日本語においても単語と接語 (clitic, 日本語では助詞など) の組み合わせはおおむね音韻語と同様の音韻的挙動を示すため、日本語に Clitic Group 階層を導入する必要があるとは思われない。

ある言語にフットが存在するかどうかを検証するに当たっては、「1 モーラ単語が許容されるかどうか」が判断基準の1つとなろう。なぜならば1 モーラ単語は、SLH の厳密適用において、フットを構成することが不可能だからである。1 モーラ単語の存在と、2 モーラまたは2 音節を一般に要求するフットの存在は、論理的に矛盾する。

言語において1 モーラ単語に対する許容度はそれぞれ異なり、例えば英語やドイツ語は1 モーラ単語 (V または CV) を一般に許容しない。辞書的な単語において1 モーラ的な発音が可能なのは接語 (冠詞・機能語など) のみであり、しかも両言語とも音節の強弱繰り返し構造に基づくフットを一般に有する。中国語北京方言も、単母音の音節核からなる軽

声音節を1モーラと仮に定義すれば、一般に1モーラ単語を忌避する傾向を持っていると言えるかも知れないが、ここでは詳細な議論は避ける。なお日本語東京方言においては、数字の粒読みや、略語における最小語規則に、1モーラを忌避し2モーラを選好する傾向が見られるが、1モーラ単語自体は在来系語彙、外来系語彙（漢語）を問わず広く許容されており、また日本語のフットに関する諸説にはその根拠が疑わしいものが多い。

日本語東京方言において、略語における最小語規則が1モーラ形態に対して排他的な傾向を持ち（または明確に排他的であり）、一般に2モーラ以上の形態を要求するのは、確かに正しいと思われるし、十分に注目に値する。しかしこれもまた純粋なフット現象とは言いがたく、且つそのように解釈すべきでも無い、と言うのが筆者の考えである。1モーラでは短すぎて略語らしく聞こえないからとか、既存の単語と音韻的に衝突しがちであるからとか、いろいろな角度からの考察が必要であろう。なお京阪方言など日本語の一部方言においては、1モーラ的な発音を一般に忌避し、たとえ1モーラ語根からなる単語であっても2モーラ的に発音する傾向が見られるが、これはより普遍性が高く、よりフット的な現象と呼べるかも知れない。

どちらにせよ拙稿は、本節においてなされた議論を鑑みれば、日本語のフットとその存在については、一般に消極的な評価をせざるを得ない。日本語のフット説に積極的な評価を下すためには、なぜ日本語においてフットを形成し得ない1モーラ単語が広範に許容されているのかについて、納得のゆく説明が必要であるし、またフットに係る音韻規則については、略語形成や言葉遊びの範疇にとどまらない、より普遍性の高い説明が求められる。

11.5. 第10節における問題の再考：独立拍と特殊拍の組み合わせが形成するもの

第10節において、「独立拍+特殊拍」からなる最短2モーラの音韻的まとまりの正体は何であるのか、という問題を提起した。フットについての議論を一通り終えた後で、もう1度この問題に立ち返ってみたい。まず、第10節において言及した「独立拍+特殊拍」からなる音韻的まとまりは、既存の韻律単位を用いる限り、1音節かまたは1フットであろう、と考えられる。しかしながら、本節で行った議論において、日本語東京方言のフットに対して一般的に有効な存在理由は見出しづらい。とすれば、「独立拍+特殊拍」の組み合わせからなる音韻的まとまりとは、蓋然的に1音節であり、また同時にすべての音韻語は

1 音節以上からなる（単独で音節を形成し得ない特殊拍は、単独では音韻語を形成し得ない）、と結論するのが最も妥当であるように思われる。

参考文献

川上 夔(1957)「準アクセントについて」『国語研究』25:21-30.

金田一春彦(2010)『新明解日本語アクセント辞典』三省堂.

窪 菌晴夫(1998)「モーラと音節の普遍性」『音声研究』2:1.5-15.

窪 菌晴夫・伊藤 順子・Mester, Armin (1997)「音韻構造から見た語と句の境界——複合語名詞アクセントの分析——」音声文法研究会『文法と音声』くろしお出版 3:9-18.

児玉 望(2008)「曲線声調と日本語韻律構造」『熊本大学言語学論集 7』1-40.

児玉 望(2011)「日本語諸方言の韻律境界と領域」『熊本大学言語学論集 10』1-26.

Ito, Junko (1990). Prosodic Minimality in Japanese. *Papers from the Parasession on the Syllable in Phonetics and Phonology*. 213-239.

Ito, Junko & Mester, Armin (2003). Weak layering and word binarity. *A new century of phonology and phonological theory: A Festschrift for Shosuke Haraguchi on the occasion of his sixtieth birthday*. Tokyo: Kaitakusha. 26-65.

Labrune, Laurence (2002). The prosodic structure of simple abbreviated loanwords in Japanese: a constraint-based account. *Onsei-Kenkyuu – Journal of the Phonetic Society of Japan*, 6:1.98-120.

Labrune, Laurence (2012). Questioning the universality of the syllable: Evidence from Japanese. *Phonology* 29. Cambridge University Press. 113-152.

McCawley, James D. (1969). The phonological component of a grammar of Japanese.

Minusa, Tomoyuki (2009). An OT Analysis of Loanword Accentuation in Tokyo Japanese. *Ibunka-no Syosoo [Aspects of Foreign Cultures]* 30. 89-100.

Nespor, Marina & Vogel, Irene (1986). *Prosodic Phonology*. Dordrecht: Foris.

Poser, William J. (1990). Evidence for foot structure in Japanese. *Lg* 66. 78-105.

Selkirk, Elizabeth (1984). *Phonology and Syntax – The Relation Between Sound and Structure*. Massachusetts Institute of Technology.

Trubetzkoy, Nikolai S. (1939). *Grundzüge der Phonologie*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Ujihara, Akira & Kubozono, Haruo (1994). A phonetic and phonological analysis of stuttering in

音声データソース URL

<http://www3.nhk.or.jp/news/index.html?page=mov>

付録：音声データアノテーション

A F1 によるアナウンス (全 8 例)

- 1 コー]シャノ
- 2 キュー]ジューハチマイ
- 3 ショクイン]シツノ
- 4 ワレルヨー]ナ
- 5 キン]ジョノヒトワ
- 6 ケンゾー]ブツ
- 7 ソ]ーサシテイマス
- 8 コー]シャノ

B M1 によるアナウンス (全 13 例)

- 1 セーネンショー]コー[ラ]ガ
- 2 セ]ンキョシ
- 3 セー]フ[ヨージンラ]オ
- 4 シューゲキゲン]バニ
- 5 ショーゲ]ンオ
- 6 テ]ープガ
- 7 セーネンショ]ーコーラガ
- 8 セ]ンキョシ
- 9 セー]フヨージンラ
- 10 クニ]ンオ
- 11 ジジュー]チャー
- 12 ショーゲ]ンオ
- 13 ヨンジュー]ネン

C F2 による発話 (全4例)

- 1 スワッテン]デスカラ[ネ]ー
- 2 イタン]デショー[ネ]ー
- 3 キーテル]ンデスヨ
- 4 ソ]ーダ

(コンスタンツ大学言語学科博士後期課程)